

# 有宵会だより

第119号  
発行所  
特定非営利活動法人  
岳陽館・有宵会  
編集 広報部  
松戸市新松戸1-6

## 九星と易断による 十一月の運勢

気学では戌の九紫

十月八日（寒露）節入

天道ア			
破	8	4	6
	7	9	2
	3	5	1
生氣			

気学では亥の八白  
十一月八日（立冬）節入

破			
天道	7	3	5
	6	8	1
	2	4	9
ア			

生氣



### 画相について

今夏の猛暑は記録破りが続出。  
まさに炎上して世間を騒がせたばかりか、しぶといコロナと熱中症に天下を奪われたこと。彼岸を超えて一服というところにきました。

八月二十日、江東区の東大島文化ホールで夏休み子供会の開催に参加し、無料鑑定会で母親や小学生の子供達の運勢を占う。特に手相における画相を研究のために集中。

友達や学校のことを話しながら、掌中の画相を点検。友達や先生の顔立ちを画相で判断する方法が画相研究です。

観相の画相は知られていても、手相の分野では応用されていないので、ここでお話をしたいと思います。

大脳と直結している手相に、潜在されている心理が表れるので、たいへん興味深いものです。

### 一白水星の人の運勢

十月筮—沢風大過上六

十一月筮—沢火革初九

十月は次第に多忙。仕事増に手を抜かず几帳面に処理。家庭は心労多いが治まる。金運は上向くが投資は抑える。予想外の相談断り、健康は安心。

十一月は思い詰めないで気楽にいく。何事も腹八分目に福来たる。下旬の失言と無駄金避ける。団欒の幸せ、疲労の回復。

### 二黒土星の人の運勢

十月筮—雷天大壮六五

十一月筮—水山蹇九五

十月は兌宮でくつろぐ運だが、以外に我が家のことが気になる。仕事は変わらず安泰。大事な予定は変わりやすいので善処。安請け合い禁物と食事は満喫す。

十一月は停滞気味で無理をしない。仕事は簡単に見えて荷が重い。人に気遣いと財布のご機嫌を利く。口腔内の診察を。

### 三碧木星の人の運勢

十月筮—天風姤初六

十一月筮—風山漸初六

十月は急に忙しくなり、慌てる。仕事は詰めが甘いので気をつける。住居や財産の問題は慎重。将来を見据えた提案は良い。縁故の葬祭は大事なものの。

十一月は順調に進む。仕事は平穏で書類処理で満足感あり。他から知識を学ぶ向上心。親子の愛情は濃い。眼精疲労用心。

### 四緑木星の人の運勢

十月筮—風天小畜上九

十一月筮—沢山咸初六

十月は自重運。気の緩みからミスや支障をきたす。仕事は厄介事を避け、軽めに行く。下旬に才能を表す機会を捉える。定価の買い物が安全。疲労続く。

十一月は日常生活が落ち着く。人の話に耳を傾ける。仕事は緻密さと創意工夫で成就する。金銭と体力は栄養源が必要。

### 五黄土星の人の運勢

十月筮—水火既濟初九

十一月筮—坤為地六四

十月は平穏で無難。凡

事にこだわらないで大らかに過ごしたい。生活リズムは着実に進める。仕事は複雑で骨折るが家庭の絆が強い。足腰鍛える。

十一月の運は上向くので手応えあり。仕事は堅実にはかどるので福。家庭団欒の喜び。大地に親しむのが吉。食餌に感謝。

### 六白金星の人の運勢

十月筮—雷水解上六

十一月筮—風火家人六二

十月はゆっくりと好転するので足並みをそろえる。物事順序に従って行動を。仕事良好運で協力者を得る。面倒な私用終え、一安心。運動不足の解消を。

十一月は平和を望むと目標に向き合うと努力が生まれる。仕事は深刺と進めるが家庭にも気を配る。健康管理忘れず。

### 七赤金星の人の運勢

十月筮—地山謙九三

十一月筮—水風井初六

十月は忙しさが続く。二兎を追うものは一兎も得ず。仕事は慎重に処理。人脈を生かし、チャンスをつかむ。どの場合も甘言に注意。金運は下向き

気味。

十一月は忙しいが能率が上がらない。焦らず冷静に対処。情報は迷わずに取捨選択。朗報あり。金運復調。体調変わらず。

### 八白土星の人の運勢

十月筮—雷地予六三

十一月筮—沢地萃九五

十月の用件は手際よく処理。下旬に予定変更で慌てる。交際は謙虚さで好感度を高める。我が家では対話不足になりがち。足元と風邪の対策。

十一月は過去の積善が現れ、苦勞が報われる。いらぬ口出しをしない。笑顔で和らげる。公私に一定の成果上げて金運良し。

### 九紫火星の人の運勢

十月筮—山天大畜九二

十一月筮—火天大有上九

十月は現状維持でいく。日常を変えずに安心感。公私に本筋を通せば道は開く。仕事益に感謝し、明日への活力を得るとき。体調は平凡ながら安心。

十一月の運気は伸び代があるので期待する。誰の歯車にも合わせて吉。今月は先に立たず後から行く。食生活の配慮大切。

# 七月有宵会報告

金原玄周 先生

## 第一部 「第14回NPO法人 人岳易館・有宵会 定期総会報告」

## 第二部 「中島敦が『山月 記』に込めたもの を新たな視点から 探る 石田宗己先 生」

「山月記」あらずじ（\*  
小説を未読のかた向けに  
議事にて補足しました）  
唐の時代、李徴（りちよ  
う）は若くして高級官僚  
となった秀才だが、非常  
な自信家で、一介の官吏  
の身分に満足できず官職  
を退き詩人として名声を  
得ようとした。しかし、  
経済的に困窮し、妻子を  
養うため地方の役人の職  
に就く。しかし、自尊心  
の高さのため、出張した  
際に発狂し、行方知れず  
となる。  
翌年、李徴の旧友の袁  
徴（えんさん）は、旅の

途上で人食い虎に襲われ  
かける。虎は袁徴を見る  
と茂みに隠れ、人の声で  
「あぶないところだった」  
と呟く。その声が李徴と  
気づいた袁徴が茂みの方  
に声をかけると、自分は  
李徴だと答える。そして  
李徴は、茂みに身を隠し  
たまま、虎になるまでの  
経緯と自分の苦しみを語  
り始める。

李徴は袁徴に自作の詩  
を記録してくれるよう依  
頼し、袁徴はそれに応じ  
た。袁徴に話しを聞いて  
もらううちに、李徴は自  
分が虎になった理由に思  
い当たる点があると話始  
める。それは自身の「臆  
病な自尊心」「尊大な差  
恥心」、またそれゆえ、  
人を避け切磋琢磨をしな  
かったせいであると気づ  
く。虎と別れ、袁徴一行  
が離れた丘から振り返る  
と、叢から一匹の虎が現  
れ、咆哮した後に姿を消  
す。

\*\*\*  
現在、滋賀県に住んで  
おり高校の国語教師をし  
ています。占いは高校生  
の時に興味を持ち、勉強  
を始めました。教師にな

り十年たった頃、周易を  
しっ かり勉強したいと  
思い、いろいろ調べ大阪  
の石本有孚先生にたどり  
着きました。石本先生の  
もとでは周易、人相、手  
相を学びました。そのう  
ち石本先生より福田有宵  
先生に周易を学ぶことを  
勧められ、福田先生のも  
とに通うようになり、約  
十四年経ちました。

今回、お話する中島敦  
の「山月記」ですが、高  
校二年生で学ぶ定番教材  
です。本来、小説の内容  
と作者の生い立ちとは関  
係ないといいますが、作  
品は作者の考え、経験か  
ら生み出されるものなの  
で、作者の中島敦がどの  
ような人物なのか知って  
おくことは重要かと思  
います。

中島敦の両親は離婚し  
ており、その後、母親が  
二回変わっています。二  
番目、三番目の母との仲  
は悪く、また父親との折  
り合いもよくなかったよ  
うです。さらに兄や弟が  
亡くなり、自分の娘も早  
くして亡くなるなど家庭  
環境は恵まれておりませ

んでした。一方で学業優  
秀で、学生時代は流行り  
のダンス、麻雀に熱中す  
るなど明朗活発な一面も  
ありました。ただ、学生  
時代から喘息に苦しめら  
れるようになります。作  
家としては、芥川賞候補  
になるなど認められます  
が一年未満の活動で、喘  
息の悪化で三十三歳の若  
さで亡くなっています。

「山月記」は中国の伝奇  
小説「人虎伝」を下敷き  
としています。両作品を  
比較すると、「人虎伝」  
での表現や登場人物像を  
そのまま流用しています  
が、全く異なる表現や人  
物像になっている内容も  
あります。そこに中島敦  
が「山月記」で訴えたい  
ポイントがあるのではない  
かと思います。

タイトルについてです  
が、下敷きとなった「人  
虎伝」の「人虎」という  
のはかつて人間であった  
ものが虎に変わったとい  
う意味です。なぜ「人虎  
伝」というタイトルを  
「山月記」に変えた意味  
については後述いたしま

小説は出だしが重要で、  
いわゆる5W1H（「Wh  
en: 〆〆」 「Where: ど  
いて」 「Who: だれが」  
「What: 何を」 「Why:  
なぜ」 「How: どのよう  
に」）が大事です。占  
いでいうところの筮前の審  
事と同じです。いつ、ど  
こで、誰が、どのように  
話が展開していくか知る  
ことが重要です。  
小説の最初に李徴の性

格が書かれております。  
「博学才穎」「性、狷介  
（≡性格は頑固で意思を  
曲げず人と協調しない）、  
自ら恃むところすこぶる  
厚く（≡プライドが高く  
自身をもっていた）」と  
いう人物なので、下っ端  
役人（といっても高級官  
僚の下の方）であるこ  
とが面白くなかった。そ  
れよりは「詩家としての  
名を死後百年に遺そうと  
した」のです。しかし、



生活に困窮し、食べていくために地方の役人となります。小説には「己の詩業に半ば絶望したため」とありますが「半ば：」とあるのは、半分は詩の才能がないと諦めていますが、半分は詩業で成功することを信じており、詩人として目が出ないのは世間がバカだから、と李徴が思っているということです。

「人虎伝」では、未亡人との仲を妨害した家族を焼き殺した因果応報を李徴が虎になった理由としています。一方で、「山月記」では「理由も分かんずくに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由もわからずに生きていくのが、我々生きものさだめだ」と天の意思よるものだとしています。天とは中国の思想で宇宙のエネルギ―の循環そのものです。星の巡り、災害、春夏秋冬の巡りもすべて「天」「天の意思」によるものです。人間ひとりにも「命」すなわち「天命」を与えており、どのような容姿、性格を持つているか、この人間

界で何をするのか、寿命はどれほどか、すべて天の意思によるものです。李徴も天に押しつけられて虎になったと言っているわけです。

ただ、袁俊に話を聞いてもらおうちに、考えようによつて理由は別にあるのではないかと李徴は気づきます。それが「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」です。自分は詩の才能がないかもしれず、それがばれるのが怖くて人を避けてきた。詩を先生に添削してもらったり友人と批評し合ったりすることを避けてきた。その反面、自分には詩の才能があるはずで、あんな奴らと一緒になれないという気持ちがある。その矛盾する気持ちが「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」という言葉で表現されています。

自分の才能を暴露するのが怖い、人と交わるのが怖い、傷つきたくない、そんな俺の気持ちを誰もわかってくれない。この李徴の気持ちは心理学でいう「引きこもり」と同じです。自分へのこだわり、自尊心が高く、詩人

として成功するこだわりを貫くが、自信がない。人からの批評を避けて、人を遠ざける、人間関係が怖く人との対立を避けてしまう。その結果、自分だけの世界に引きこもるわけです。

ただ、旧友の袁俊が李徴の話を黙って聞いてくれるうちに、彼に変化があるわられます。これは心理学でいう「傾聴」といいます。「傾聴」とは、聞く側が、話し手に関心を示し、話を聞くという姿勢をもって耳を傾けることです。重要なことは、話の内容にコメントをしない、批判をしない、否定をしない、という姿勢です。そうすると、最初、話し手は自分の苦しい気持ちを話します。傾聴されるうちに、これなら話してもいいかな、とどんどん話すようになります。そのうち、自分でも気が付かなかつた一面を話すようになるわけです。

その李徴の気付きが、先ほどの「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」というわけです。虎になつたのは天から押しつけられたものだが、ひよつとず

ると自分にも原因があつたのではないかと気付くわけです。これは袁俊が話を聞いてくれたからです。

ここも重要な点ですが、中島敦は袁俊の性格を「人虎伝」から大きく変更しています。「人虎伝」の袁俊は偉ぶつた感じで、積極的に李徴に話かけますが、「山月記」の袁俊は温和で物静かで多くを語らず、李徴の話を無条件で受け容れる人物として設定されています。

李徴の「自分の詩を世にだしたい、人間性を失っていく自分の苦しみ悲しみを誰もわかつてくれない、でもわかつてほしい」という訴えと、中島敦の「人間はしよせん孤独で、その孤独は家族であつても拭い去ることはできない、喘息のせいで自分はその長くないかもしれない、自分の文学作品は世にだせないかもしれない」といった気持ちは全くリンクしています。中島敦もまた袁俊を求めていたのではないのでしょうか。

才能を磨かないと後悔しますよ、悔いるような人にはならないで、と

いうのが従来の「山月記」の解釈でしたが、果たして中島敦はそう言いたかつたのでしょうか。

小説の後半の一節に「山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮つているとしか考えない。ちようど、人間だつたころ、おれの傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかつたように。」とあります。この李徴の心の苦しみを表現した一文の「山も樹も月も俺の気持ちをわかつてくれない」が小説のタイトルである「山月記」の由縁です。

山も樹も月も俺の気持ちをおわかつてくれない、俺は全くの孤独なのだ、これがまさしく中島敦の気持ちそのものだと思います。

李徴は、苦しい、苦しい、としか言わなかつたのが、袁俊に自分の胸の内を聞いてもらううちに、虎になつた理由について気づき始めます。また最初は自分のことしか話さなかつたのが、最後には残された妻子のことまで頼める余裕がでてきます。別れ際に李徴は、帰途

に、この道を通らないように、また、最後に自分の姿を見せると袁俊に伝えます。最後の一節は「虎は、すでに白く光りを失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思つと、また、もとの叢に踊り入つて、再び其の姿を見なかつた」とあります。

「すでに白く光りを失つた月」というのは、李徴と出会つた夜明け前から別れる夜明け後の時間の経過を表す情景描写を示すとともに、李徴の様相を表現しています。それは、自作の詩を後世に残したいという強烈な執念が袁俊によつて叶えられないようになった、分かつてほしいという自分の気持ちも袁俊にだけはわかつてもらえた、しかも妻子の面倒まで見てもらえることになつた。そうなつた以上、虎が人間性を留めている理由がないわけだ、やがて李徴は全くの虎になるわけです。「再び其の姿を見なかつた」とありますが、虎が去つた後、袁俊はその場にとどまつたが虎が現れるのを待つたが二度と虎は現れなかつたという表現です。



悲しくも美しいラストだ  
と思います。  
天が人それぞれに天命  
を与えていることについ  
て、ここで漢の武帝の時  
の歴史官であった司馬遷  
の話をしたいと思います。  
司馬遷は武帝の怒りを買っ  
て宮刑に処せられます。  
宮刑は屈辱的な刑で自死  
する人もいたそうですが、  
司馬遷は父からの言いつ  
けで中国の歴史書「史記」  
を完成するまで死ぬわけ  
にはいきませんでした。  
その司馬遷は、天は善人  
に味方をするというが本  
当だろうか、と疑問をな

げかけています。どんな  
に正しい行いをする聖人  
も若くして餓死する一方  
で、大悪人が好き勝手を  
して天寿を全うしたりし  
ます。果たして、天道は  
是か非かというとならば  
司馬遷ははっきり言って  
います。  
その考え方を中島敦も  
持っていたと思います。  
自分は家族に恵まず、喘  
息にもなり、作品が世に  
出ないかもしれない。ま  
た、李徴もまた、自分の  
詩が世に出ないかもしれ  
ない、仮に哀憐が世に出  
してくれても自分は人間  
性を失って虎になってし

まう、ど  
うしたら  
よいのだ  
ろうか。  
天命を  
違う視点  
で申し上げ  
ますと、  
李徴の、  
詩人とし  
て成功し  
自分の詩  
を世にだ  
すという  
自分を表  
現したい  
欲求、自

分らしく生きたい欲求、  
は誰にでもあります。ま  
た、自分のことを分かっ  
てほしい欲求も誰にでも  
あるものです。  
この偏屈な男が虎にな  
るといふ話で終わるので  
なく、「山月記」を読ん  
で、自分らしさとは何か、  
自分が求めることは何だ  
ろう、自分のことを人に  
理解して欲しい、理解し  
てもらえていないだろうか、  
理解してもらえていない  
なら理解してくれる人を  
欲しくはないだろうか、  
そういうことを考えて、  
我々は改めて「山月記」  
を読むのがよいのではない  
でしょうか。私はそれを  
生徒に考えさせたいと思  
いましたが、なかなかそ  
こまでは伝えきれなかつ  
たかもしれません(笑)

ご清聴いただきありが  
とうございました。  
『天の意思について』の  
解説 \*石田先生の「山  
月記」のご講演の中で  
「天」について詳細に解  
説いただきました。別枠  
にて掲載しました。

天は留まることを知ら  
ないエネルギーの循環で  
すから、図に描くと丸  
(まる)になります。  
これは易では「天(☰乾)」  
になります。天の意思を  
受けて人間はそれぞれ  
「天命」を受けるわけ  
です。植物で説明すると一  
番わかりやすいかと思  
います。易経の乾の卦辞で  
「元亨利貞」と難解なこ  
とが書かれておりますが、  
こちらと合わせて解説い  
たします。  
冬の植物は種の状態  
です。種は外側からは何の  
変化も見えませんが、そ  
の内側にエネルギーが充  
満しております。種は春  
になると発芽します。芽  
は双葉から若木になり、  
ぐんぐん生長し大木とな  
ります。そのぐんぐん生  
長する留まることのない  
エネルギーのことを「元  
亨利貞」の「元」とい  
います。大木はやがて花を  
咲かせます。花とは溜まっ  
たエネルギーが形として  
現れたもので、ものごと  
がスムーズに進む様が  
「亨」となります。植物  
は生長するだけでなく、  
秋になり次の世代に向け

て実をつけます。そのた  
めには養分を蓄える必要  
があり、必要のない葉つ  
ばを落とします。ものご  
とが収まっていく姿が  
「利」となります。もし  
て種としてエネルギーを  
蓄えている形が「貞」と  
なります。  
このエネルギーの循環  
を人間社会にも当てはめ  
てみます。留まることの  
ないエネルギーを広い意  
味での「仁」となります。  
種は内側に大きな変化が  
起こっているところだ  
が、これは「智」となり  
ます。  
儒教の世界では「儒家  
は先王(伝説時代の王様  
で立派な政治を行ったと  
される。堯・舜など)の  
言行を学習する」とい  
います。先王がどのような  
功労を残し、どのような  
政治を行ったかを学ぶこ  
とで自分のものにするこ  
とです。「学習」  
の本来の字は「敷習」と  
書きます。この「敷」の  
字の中には「教」の字が  
入っています。これは、  
手に棒をもって生徒を厳  
しく教えている姿を表し  
ます。指導者がいて生徒  
がいて、先王の政治を学

ぶことが「学」です。  
「習」の字を形作ってい  
る「白」は鳥の雛を指し  
ます。習は鳥の雛が羽ば  
たく姿で、親鳥が羽ばた  
く様子を雛に何回もやつ  
てみせている。「習」は  
自分でやる、実践するこ  
とです。学習とは  
教えられたことを、自分  
でやってみる事です。  
自分の中で何が是非か、  
何が善で悪か、どうい  
うときに何をすべきか、と  
いう自分の基準を作るこ  
とが「智」となります。  
自分で基準を作った後、  
それをどのように周りに  
伝えていくのでしょうか。  
それは親や子、自分の親  
しい人に向ける思いやり  
を全く知らない他人にも  
施していく、社会に及ぼ  
していく、国家に及ぼし  
ていく、ということ  
留まることないエネルギー  
のなかで、一番思いやり  
の形で発揮しやすいのが  
狭い意味での「仁」とな  
ります。

この力を他人に及ぼし  
ていきますが、どうい  
う姿でしょう。立派な姿勢、  
美しい姿勢、礼儀作法な  
どの見える形になります。  
これが「礼」となるわけ

この力を他人に及ぼし  
ていきますが、どうい  
う姿でしょう。立派な姿勢、  
美しい姿勢、礼儀作法な  
どの見える形になります。  
これが「礼」となるわけ

この力を他人に及ぼし  
ていきますが、どうい  
う姿でしょう。立派な姿勢、  
美しい姿勢、礼儀作法な  
どの見える形になります。  
これが「礼」となるわけ

です。陽が極まれば陰が兆してきます。その時に自身自身のことを振り返りま。枝葉を落とすことで、人間としての行いを見つめ直します。これが「義」です。

さらに、自分を見つめなおし、もう一度、自分で先王の言行を学習し、内側に力を溜めてエネルギーを循環させていく。これが人間社会における「仁」「義」「礼」「智」の働きになります。

また、これらを八卦に置き換えてみたらどうでしょう。「仁」は思いやりのエネルギーを人に施していくということ、「乾」、思いやりで人を包み込むということ、「坤」、留まることがないということ、「震」、人の徳でもって人を導き育てるということ、「巽」になるのではないでしょう。か。「礼」は美しく表れる姿勢なので「離」となります。「義」は人間として、してはいけないことを思いとどまり、更に高い次元を目指すので「艮」、いけないことを省くので「兌」、省いて

残ったことを人間として実践していくので「乾」も含まれるかと思えます。「智」は学習し是非の判断をするので「坎」になるかと思えます。

### 第3部 福田有宵先生ご講演

本日（令和5年7月29日）お配りした会報の1ページ目に福島原発の処理水について書いております。紙面の都合上、書ききれなかったのですが、この場で補足させていただきます。

政府は処理水を海に放



水することに躍起になつていきます。漁業関係者は風評被害を恐れて国に放水を断念するようお願いしています。また、中国も処理水を放水しないよう要求しています。さらに、中国は放水したら日本から海産物は買わないと脅してきています。問題点は二つあります。処理水を放水したいが放射線は大丈夫だろうか、海産物の買い手が見つかるだろうか、という点です。中筈で「地天泰」（下から艮乾巽異離離）で之卦が「地火明夷」となりました。

おおよそ安泰である。安泰という

ことは放射線も基準内であり、問題がないとみていいわけですが、交卦について、はじめは天山遯である、つぎ

は風山漸である、そのつぎは離為火であるとかの具合、すなわち、成り行きをみます。一爻ずつ、艮、乾、艮、巽、離、離、離、離という動き方ととらえることもできます。下から、まず、「艮」で留まります。一か月は動きが取れないでしょう。2か月目に「乾」となりますから、正攻法の交渉の仕方を行います。国と国の交渉なので国内の話ではありません。しかしながら、答えがでずに「艮」の動きのない状態に戻ります。ただ、この艮は妥協をしない精神をもっています。「巽」で何か条件、情報が出てきます。最終的に離が二つ重なって離為火になりますね。これで決着ということに期待したいと思えます。

之卦が「地火明夷」になるという事は2つの

答えがあります。見通しがつくか、見通しがつかないか、つまり、答えが見えないということですね。本来、科学的な検証で泰の状態ですので、よしとしなければならぬのに受け入れられない。これは之卦に「地火明夷」

を含んでいるためで、半信半疑となっている状態であり、風評そのものです。自分にはわからないが、人が言うなら正しいだろうと、つい自分の意見を曲げてしまう。政府は地天泰の状態に秋に放水したい、中国に交渉して、なんとか了承を得たい。色々な事情が日中の間にあります。中国は簡単に了承しないでしょう。さて、この件についての取引を中国とできるでしょうか。このヒントは、地天泰の中に埋まっています。裏工作や裏口入学ができるのは地火明夷である場合ですが、この場合はどのようなことになるでしょうか。結果的には先のことよりも、現状で押し切ろうという事を政府は考えているだろうと思えます。

### —恩師・学友への想い— 大川法祥先生 (大阪)

私のお恩師 石本有孚先生の思い出と、石田宗己先生のことを書いてくださいます。どの福田有宵先生のご依頼が御座いました。

私如きが…と遠慮したい処ですが、お二人の類無きお人柄を身近に知っているのは、今や私しか存在しないと思ひ至りこの珠玉を埋め去るのは勿体ないこと、多くの方々に知らしめるのが私の最後の役目だとの思ひをこめて書かせて頂きます。

今は亡き石本有孚先生は、日本占術協会顧問として東京本部の著名な先生方との交流も深く、特に大熊茅楊教室とは兄弟校としての親交が有りました。

関西地区でも冠たるご存在で、日本易学専修学院有孚会会長として多くの門下生を育んで来られました。

有孚の「孚」は、「マコト」の意。字が示す如く、親鳥が卵を温め羽化した雛を大切に育てると言う無償の愛情をもって生徒を慈しんで来られました。私は門下生として、そのぬくもりの中で長年過ごせた幸せをしみじみ感じて居ります。

ある時(平成十三年四月)、一人の青年が入会され、

教室に坐る姿に感じるものが有ったのは私だけなのでしようか？

聞けば、インターネットで検索し、石本先生の存在を知ったとの事。その真摯な姿勢に石本先生も特別な思ひが有った事でしょう。

石本先生が信仰されている笠山荒神様に毎月参られる時、希望者が数人同行する事もあり、大祭の折にはバスをチャーターして参詣した事もありました。

その笠山荒神様の殿中に掲げられた由緒書の意に不明瞭な箇所があり、石本先生も解釈を依頼され乍ら説明できなかつた文言を、石田先生が見事に解釈して下さいました。

石本先生は、「この大役を果たす為に、石田君は、私の処へ来てくれたのや」と大層喜ばれ達筆を奮って書き直し始めました。



氣比神社の由緒も  
とうとうと語って下さった →  
石本先生を心から思います。

これが完成すると、ご自分の寿命も終ると感じた先生は、わざと長い年月をかけて書き上げ、表装も新たに完成した額を奉納できた吉日、誇らし気に大満足されて居られました。

日々。

平成十六年(二〇〇四)

十月二十三日

若狭 名田荘村に於て

「伝統文化を観る」と題して村をあげての一大イベント「安倍晴明一千年祭」が行われ、その催しの為、石本先生にご依頼が有り、鑑定会が開かれました。私を含む四人の鑑定士が待りましたが、石田宗己先生は、その時が初めてのイベント出演でした。有益な実占だったと述べられていました。翌日は、御土御門家、宮内庁の方々のご来参のもと、厳粛な式典が斎行され、私達も参列できた事は、貴重な体験でした。石本先生のお誘いで当日は、福田有宵先生、佐藤宗眩先生も馳せ参じられました。

平成十七年(二〇〇五)

八月 金沢へ。新井白蛾先師の墓参に先立ち少林寺・宝勝寺のご住職 河野秀道様のご案内で白蛾先師の姉上 青蛾様の墓前にお参りしている時、一羽の青筋アゲハがヒラ

平成16年(2004)10月23日

← 一千年祭の為の  
立派な舞台に於て  
(若狭) 名田荘村の  
土御門家の墓前にて...  
(会場にて鑑定中)



ヒラと舞来たり、墓石を一周して去り行きました。私は一瞬、青蛾様の青と青筋アゲハの青の連想から蝶に化身した魂が、お喜びを見せて下さったのかな?と感じ入りました。石本先生、石田先生も同じ想いだっと思ひます。その事が有って、昨秋、

有宵会有志の方々とお大坂住吉大社に正式参拝の最中、大きなクマ蜂が飛来し、羽音をブンブンと乍ら雅楽を舞い終わる迄、ずーっと飛び廻っている現象をまのあたりにした時、瞬時に金沢の青筋アゲハを思い起こし、隣席でお祈りしている石田先

生にタッチし、ア・ウンの呼吸で頷き理解し合いました。又しても、同じ神秘体験を分かち合えた不思議…。

最も忘れ難い思い出は、金沢往復の長距離ドライブです。山中温泉で一泊、金沢への新井白蛾先生の墓参。

の協賛で野田山墓所入口に建つ朽ちかけた黒門を、台湾産の黒曜石にて、再建立しました。その土台に刻まれた「石本有孚」の名を感慨深く見つめ、ソーツと撫でられた先生。ひとしおの想いがあり。だったと思います。

その建立の数カ月前、黒曜石運びと白蛾先生の墓地に建てる顕彰碑等の商談の為、先生に同伴した私は、金

地元の寿司店で昼食

石田先生の旺盛な食欲にビックリ！



沢、野田山の石材店に足を運び、先生の熱意をつぶさに見つめて参りました。

後日知った事ですが、この顕彰碑の立派な撰文は、石田宗己先生が書かれたものと聞き及び、又しても、石田先生の博識により有孚先生は箔がつき、喜ばれ

た事と 생각합니다。

ご高齢の先生が「これが最後のドライブやなあ」と仰り乍らの帰途、自信に満ちたスマートな運転スタイルとスタミナに關心するばかり。後部座席に同乗の石田先生も同じ思いだったと思えます。

事実、最後となったこの旅は、心の奥深く、樺火の温もりとなつて残っています。

なつかしい記憶を迎え、ばきりが無く、石本先生亡き後、有孚会は、先生のご意志で解散となり、虚ろな淋しさのなか、石田宗己先生という逸材の行く末を案じていた処、福田有宵先生の易学教室に参入され安堵致しました。

石田先生のお声に魂がゆさぶられた事でしよう。穏やかな福田先生のご慈愛は、広く大きく羽ばたいて、人それぞれに応じた生きる力を注いで下さいます。

有宵先生への感謝をこめて、拙い乍ら私の恩師への思いを書かせて頂きました。

—合掌—

師と仰ぐ孚の教え  
褪せるなく  
久遠のしるべ  
満ちてゆかまし

—法祥—

【NPO通信】

◎賛助金ご報告

次のかたがたより、有宵会活動費への賛助を賜りました。

皆様からのご厚情に心から御礼申し上げます。

令和五年八月十九日現在  
(敬称略・順不同)

大川法祥  
堀内憲子 堀内大輔  
菅原有恒 佐藤宗眩  
木村眞理子  
今中正美 今中陽子  
大澤瑤扇 市川裕梨  
久保田恵都予  
森本道子 金原玄周  
ベラ・エクウス  
櫻紫玉 平柳真由  
阿部治 八川林加  
匿名(一名)

◎行事・活動報告

八月の猛暑の中、福田有宵先生を含む、八名のかたが、江東区の鑑定会に参加されました。東大島文化センターの鑑定所には、家族連れのかたで賑わい、多くの方に占いを通じて将来への見通しを考えていただく機会を提供いたしました。

◇日程／令和五年八月二十日(日)  
東大島文化センター

「ふれあいまつり」占いコーナー  
場所／江東区東大島文化センター(江東区大島)  
・鑑定人数 一〇一名  
うち、相談件数一七〇件(一名につき複数件のご相談あり)  
・出演者 八名(うち一名は受付専任)  
(敬称略・理事長他、会員五十音順)

福田有宵  
岩崎杏泉 卯月亭  
慶峰 佐々木敦子  
谷岡静枝 野口宗恩  
濱口リヲ

※九月二十四日に開催されました「第三十二回三鷹国際フェスティバル」の鑑定会のご報告については、次号でご紹介いたします。

◎新規に入会者ご紹介  
次の七名の方々が新たに有宵会にご入会されました。勉強の意欲が高く、将来に向かって幅広いご

活躍が楽しみです。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

◆令和五年七月入会  
(敬称略・五十音順)

- 石田有韻
- 今中正美 風音有巫
- 佐々木陽子
- 中島みゆき
- 吉乃叶恵 渡邊くま

◎次回行事予定

次の日程で無料鑑定会の開催を検討しております。十一月の有宵会例会とお日にちが近いため、お間違えのないようご確認ください。

◆日程／令和五年十一月二十五日(土)  
足立区勤労福祉会館  
展覧会  
場所／足立区勤労福祉会館  
社会館ブルミエ  
活動内容／無料占い  
コーナー開設

今年も、足立区勤労福祉会館様から占いコーナー

開設に関するお誘いをいただいております。実占の学び多い機会となりますので、ぜひ、会員の皆様にもご協力をいただけますと幸いです。  
\*イベント名称は、主催者側の都合で変更となる場合があります。

【募集】鑑定会にご参加をしてくださる先生方を募集します。  
\*各イベントで六・七名程度  
\*経験・占法不問。  
問合せ先…

福田有宵先生・佐藤宗眩先生・事務局 八川林加まで。

【ご案内・自由参加】

◆日程／十一月十一日(土) 午前十時半集合  
西の市  
場所／浅草西の寺・鷲在山長國寺様

※福田有宵先生のご参加は、午前中のみのご予定です。なお、ご多忙のため、急なご予定変更となる可能性があります。予めご了承ください。

【事務局だより】

大橋初枝様

(享年八十六)

去る八月十九日、三十年来の交わりを重ねた、大橋初枝さんが亡くなりました。田無神社様とご縁が深く、また近くの真言宗総持寺様の六地藏尊に赤の前掛けを付けたり、また知人の介護など晩年は精一杯に過ごす日々でした。

春頃から肺癌は終末を迎え、死を見つめるようになり、耐えながら自得する心がありました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

福田有宵 拝合掌

◆次回の例会情報◆

日程／十一月二十三日(木)

※勤労感謝の日です

午後一時～五時  
会場／

足立区勤労福祉会館ブルミエ 第二洋室  
(千代田線 綾瀬駅西口 徒歩三分)

\*今後、例会およびイベント内容は、直前に変更・中止となる場合がございます。各種情報は、有宵会LINE連絡網および、有宵会ホームページ等でご確認ください。

◆二〇二三年度会員継続手続きについて

期限…十月末まで  
年会費…八千円

七月から二〇二三年度が開始されております。ご継続をいただけるかは、期限までに年会費の納入をお願いいたします。

※すでに年会費を納入済みの方はお見捨ておきください。

※九月号の会報誌まで、ご継続をされない方にもお届けする場合がございます。

■再掲 《会員向け》  
有宵会LINE連絡網のご案内

有宵会会員向けの連絡手段のひとつとして、LINE連絡網を開設しております。迅速なご連絡ができるばかりでなく、会場地図などを画像やURLでご案内することが可能となります。スマホをご利用されているかたは、ぜひご検討ください。

《重要》

\*連絡網は、有宵会退会後にはご利用いただけません。

\*連絡網の目的外利用(営業活動・勧誘・その他行為)はお断りさせていただきます。

\*また、加入者の情報検索をする行為、無断で第三者に個人情報を提供する行為は、禁止です。

\*本件の詳細は、有宵会事務局 八川林加、福田有俊先生までお問合せください。

■七月度例会参加者

七月度は、四十九名のかたがご参加をされました(懇親会は、二十一名が参加)。

七月度の総会后、久保田恵都先生にご尽力をいただき、四年ぶりに懇親会を行うことができました。懇親会では、これまでの状況を報告したり、楽しく会食をしたりと、賑やかなひと時を過ごしました。

なお、流行病は未だ共存している状況のため、今後の懇親会については、状況を見ながら、開催の判断をして参ります。

事務局長 八川林加

